

『英語力とは何か』

山田 雄一郎 著 (2006)

大修館書店 238pp.

山口 高嶺

早稲田大学 非常勤講師

著者は、日本の英語教育にも様々な提言をしている（ごく一例として、山田 2005）。著者の教える大学生の翻訳力が数ヶ月で向上したという一例から、英語力を考察していく。単純に分割して言語能力は測定できるといったラドの静的で素朴なモデルから始まり、ハイムズ、カミンズ、バックマンといった大御所のテスト論の概要を確認しながら、現状の言語能力観がもはや動的（それ故、規定しづらくなっている）なものになっていることを踏まえ、しかも、従来には指摘の少なかった日本人の英語力について、山田独自のカミンズの修正モデルを用いて、日本人の英語学習方法まで提案する。

山田修正モデルは、カミンズが BICS と CALP という根底でつながっている 2 つの氷山をモデルとしているのに対して、その氷山を日本語力と英語力という捉え方で論じている。著者の提案している日本人の英語学習方法は、日本語力がある程度ある学習者に対して、日本語能力と重複する部分は直接の英語教授の対象とはしないものである。

さて、この英語学習法には異論を感じ、代案を出すことも可能だ。ただ、「戦略構想」の出現、早期児童教育の高まり、TOEIC で英語力を見ようとする経済界の要請、こうした議論の際に肝心の英語力の定義が不在では、その場限りの政策・教授法が浸透していく原因になる。

従来の単一言語能力観から脱出しようという提案、日本人学習者を広い意味でのバイリンガルと捉え、日本語力と英語力を包括して説明しようとする試みは、単にこれまでになかったというだけでなく、日本の英語教育だけにとどまらず、国語（日本語）教育をも巻き込み、直接的な指針を与えうるという可能性を秘めているだけに、考えさせられる書に思える。

参考文献

山田雄一郎 (2005) 『日本の英語教育』岩波書店。